

2022年10月18日

子どもの日本語教育研究会 研究企画委員会 Project-B

## 活動報告 読書会(5) 2022年5月1日実施 『思考と言語 新訳版』第5章 概念発達の実験的研究

ヴィゴツキー,レフ.セミヨノヴィッチ.著,柴田義松訳(2001)『思考と言語 新訳版』新読書社

私にとって、この読書会はまさに“発達の最近接領域”です。毎回、普段考えないようなことに脳ミソをつかい、皆さんとのディスカッションの中で「そうだったのか」と納得したり、「やっぱりよくわからないなあ」と後々まで引きずったり、自分一人では決してできないことを、経験させてもらっています。今回の5章も、“子どもはどうやって概念を形成するのか”を明らかにするための実験を紹介し、概念の形成過程を明らかにしていくという内容で、初めて聞く言葉と格闘することになりました。

子どもの概念発達の第一段階が「あてずっぽう・主観的結合」というのはなんとなくわかりますが、第二段階の「複合的思考」、さらに進んで「擬概念」と出てくると、頭の中は「？」でいっぱいになります。保育園との連絡帳を引っ張り出して、息子達が言葉を獲得していく過程に関する何かよいエピソードは無かったか探しましたが、見つからず。ただ、なんとなくぼんやりと、「複合」というのは、子どもが自分なりの理屈でものともとの結びつきを判断し、一般化していくこと、と理解しました。そして、「複合」で考える子どもと「概念」で考える大人が、共通する言葉を使って相互理解を深めていくという指摘が面白いと思いました。同じ言葉を使っても大人と子どもがそれぞれ頭の中に思い浮かべているものは異なっていて、それでもコミュニケーションは成立し、だからこそ、その過程が子どもの概念発達の原動力となるようです。このことは訳者の後書きでも述べられていて、子どもと関わる大人の役割の大きさを感じました。また、報告の後のディスカッションの中では、「知識の獲得がそのまま概念形成に結びつくわけではない」「経験・体験があって初めて言葉がのっていく」といった意見が出され、「概念形成」について考える視点が少し増えたような気がしています。

子どもは周囲との関わりの中で概念を形成し発達させていく、そして、「概念は言葉なしにはあり得ず、概念的思考は言語的思考の外では不可能である」(p163)というヴィゴツキーの言葉の意味を考えると、多言語環境で育つ子どもたちが置かれている状況というのは何と複雑なのだろうと改めて思います。以前関わっていた中国・樺太帰国者の子どもたちのことを思い出すと、自分の認識の甘かったことを突きつけられるような気がします。子どもたちが、身近な共同体に自分なりに参加できるように、そして、周囲と関わりを持ち、自分の持つ力を発揮できるように、どのような後押しが出来るのか、そこをもう一度考えたいと思いながらこの読書会に参加しています。

(小川)